

# カフカの『掟の前で』について

吉 野 英 俊

## 1

小品『掟の前で』 („Vor dem Gesetz“) は短篇集『村医者』 („Ein Landarzt“) に収められているが、それはまた刑務所の教誨師がヨーゼフ・K に語る物語 (=伝説) として『審判』 („Der Prozeß“) の第九章「聖堂にて」に組み込まれてもいる。1914年12月13日の日記にカフカはこう記している。『仕事をしないで——一頁だけ書いた (伝説釈義) ——書きあげた章を読みかえし、部分的にはよくできていると思った。ぼくがたとえば、伝説釈義などでとくに感じているような満足感や幸福感には、報酬を支払われねばならない……という意識がたえずある<sup>(1)</sup>』言うまでもなく「書きあげた章」とは『審判』のいくつかの章のことであり、「伝説釈義」とは教誨師の語る「伝説」に基づいて次々に提出される「解釈」のことである。従って『掟の前で』の成立時期は日記の日付の少し前であると推測される<sup>(2)</sup>。

田舎から来た一人の男は「掟」への入場を熱望しながらも、理由もなく一人の門番に阻まれている。しかも (これは男の死ぬ間際に判明するのだが) その門はこの男のためにだけと決められていたのだ。この入場禁止は「今は駄目だが、あとでなら」という条件付きでなされる。入場の可能性は皆無ではない。

しかし、門番は掟にいたる途中の広間に立つ強大な力を持ついく人もの門番のことを笑いながら告げる。そのような困難が待ち構えているのなら目的達成は事実上不可能であると男は考えて、「待つ」ことを決心する。男はひたすら門の前で待ち、結局生涯を浪費してしまう。なるほど彼は自分の望みを遂げるべく嘆願、買収、観察といったあらゆる手段を試みるのだが、「待つ」という基本態度は一貫して変わることがない。彼には他のやり方がなかったのだろうか。J. H. Mense は『自分のためにだけと決められている掟への入場の熱望と門番による理由のない入場禁止というパラドックスを解くものではないが、男の状況を明らかにするために役立つ』と但書きをしつつ、男の三つの可能性を挙げている。<sup>(3)</sup> カフカ自身、このような可能性を考えないでもなかったことは、小説『審判』の内外に散在するいくつかの例証が語ってくれる。この例証に関しては後に J. B. Honegger の著書に基づいて扱うことになる。

Mense の言う三つの可能性とは、第一に男が門番の威嚇を恐れず「掟」の中へ入ろうと試みることであり、第二には何か意味のあることをするために、後にした故郷へ再び戻ることである。そして第三に、門番によって阻まれている窮状の中で自己の最善を尽くそうと試みることである。

まず第一の可能性がどんな結果をもたらしうるのかということは、後で述べるように門を突破する例が他にいくつかあるにもかかわらず状況が異なるために、我々には判断できない。番人がぼんやりしていたり、ごく簡単に策略にのせられたりする例がある。それはともかく、ここでは田舎の男は第二、第三の次第に力を増す門番の存在を教えられ、さらには自分の眼前の最下級の門番の強力そうな外貌から判断して自ら「待つ」ことを決断するのである。男の判断の根拠は不確実なものによっていることが分る。というのは、この最下級の門番は第三の門番の姿さえもう耐えられないのだから、掟の全ヒエラルキーについて正確に知っているとは考えられない。従って、次第に力を増す云々という「掟」観は門番自身の想像であると考えられよう。また他方、田舎の男の判断も同様に門番の外貌(『大きなとがった鼻、韃靼人のような長くて薄い黒いひげ』)にのみ基づくものである。男は素朴な信じやすさと自ら作り出した幻想にとら

われ、その憧れを達成できないと言えるだろう。ところが「伝説」を注意してみれば、この男は最初から幻想にとらえられていることが判明する。伝説の始まりはこうである。『掟のまえに一人の門番が立っていた。この門番のところへ田舎から一人の男がやってきて……』(Vor dem Gesetz steht ein Türhüter. Zu diesem Türhüter kommt ein Mann vom Lande und.....) つまり男は直接に「掟」へではなく、「門番」のところへやって来るのだ。男は門番という感覚的にとらえうる形姿を掟と同一視している。いや、「最初から」という事実を考えると、「掟」は門番という感覚的にとらえうる形姿を通してはじめて認識されうるものなのではあるまいか。

第二の可能性「帰郷」は男にとってそもそも不可能であるし、彼の望むところでもないように思われる。掟は彼にとっては(あるいは彼の言葉によれば『万人が掟を求めている』のだから)どの人にとっても自分の生を決定する何か絶対的なものを意味しているのだ。男は掟の前に到着して以来、あらゆる手立てを尽くし、入場の機会を片時も失うまいと門番を観察しつづけるのだから、この執着心から判断すれば、そもそも戻れるくらいなら彼は出発しなかったとさえ言えよう。カフカの他の作品(それは文字通り『出発』(„Der Aufbruch“)と題されているのだが)には、そうせねば自分の望みを叶えられないために出発すること自体が目的になっているという内容のものがある。なお「観察」という行為はカフカにあっては無益な、消極的な行為ではなく、むしろ積極的な攻撃であることを思い起すならば、「伝説」の中で男が出発し、観察しつづけたことは掟に入場するための唯一の方法と言えるのかも知れぬ。あのような結末を迎えることになるのだが、男の希望はただ「観察」することにだけあったのではないか。

第三の可能性は、たとえば策略によって門番を出し抜く方法である。Menseの言葉を引用すれば『田舎の男が待つことを本来の生と見せかけ、自分の決定能力の無さを平静さであるとよそおうことによって、このパラドックスをかいぐぐって攻撃すること』<sup>(4)</sup>である。だがそうするには、つまり掟への憧れを胸に秘めておくには男はあまりに人間的である。あるいはまた門番と親しく意志を

疎通しあうことにより、彼と同意見であることを明らかにさせることである。たしかに門番との対話を通して男の矛盾、苦悩が明瞭になれば、こういう可能性もないとは言えまい。Emrich の言うように『役人たちは彼ら自身の厳格な法則性から脱出しようと望んでおり、人間が自由に入場することを熱望している<sup>(5)</sup>』とするならなおのことである。だが、意志を通じあうには両者ともあまりに非人間的である。男も門番も自分の役割にしっかりと拘束されている。門番は自分の任務の意味さえ知らないほどに、男は男であまりに自分の目的にしがみついている。男と門番の意志の疎通を妨げているものは、彼らの二律背反的な関係である。一方では男は門番を信頼せざるをえない、というのも彼は掟の代表者だからである。他方、門番はおよそ信頼に足る人物ではなく、何よりも自分の入場を阻んでいる唯一の障害として、男の憎悪の対象でもあるからである。

かくして男は掟の前で進むことも退くこともかなわず、その前につなぎとめられる。これは正しく『目標はある。だが道がない。われわれが道とよんでいるのは、逡巡にはかならぬ』（罪、苦悩まことの道についての考察）という状況だ。

## 2

カフカがそうした形で公表したように、この「単純な話」を孤立させて見るならば、密閉性、自己完結性の印象は免れえないだろう。門番伝説は掟の入口への到着という、田舎の男の前歴には触れない無前提の形で始まり、門番の外套の襟にいる蚤にまで言及されるかと思えば、もっと言及されてしかるべきと思われる細部は故意に度外視されている。細部はおろか最も重要と思われる「掟」の内容規定もされぬまま、一切があいまいである。たとえば男と掟とをつなぐ唯一の人物である門番の性格、発言、義務は（後に僧（＝教誨師）が自らそれを展開してみせるように）玉虫色に変わり、時には正反対の解釈さえ許容するような具合になっている。いやむしろこの伝説は論理的な解釈の抜け道を至る所に設けることだけを意図して作られているように見える。

この伝説を、しかしながら、『審判』のコンテキストの中で読むならば、いくつかの手がかりが得られよう。僧の言うKの思いちがいとはどの点にあるのか。伝説の内容はKがそうしたように普遍化できるのか。伝説の後で僧が提出する「釈義」は「伝説」に対してどういう意味をもっているのか。あるいはそれと関連して、僧はこの伝説を語ることによって何を意図しようとしたのか等々の疑問が生じるだろう。

まず、Kの思いちがいがどの点にあるのかを考えるために、僧との出会いから見よう。Kは裁判所の不当な先入見を僧に訴える。『私の訴訟に関係している連中はみんな私が何か悪いことをしたと思っているのです。しかもそれをなんのかわりもない人々にまで吹きこむので、私の立場はますます悪くなるばかりです』と。次いで『自分の体験したことを言ったまでです』（我々読者もKのこの言明に嘘偽わりのないことを知っているのだが）と言って、裁判所の腐敗堕落ぶりを批難する。『……女の尻を追っかけまわすような連中ばかりなんです……』僧は長い沈黙の後で『いったいあなたには、二歩離れた先はもう見えないのか』と叫ぶ。この叫び声は、Kの遠望のない、誤った裁判所観が彼の運命にどれほど決定的な意味をもっているかを示すものである。『それは怒ったための叫び声ではあったが、同時にまた、他人が倒れるのを見て、自分までも驚き、不用意に思わずたてた叫び声のようでもあった』やがて僧は叫んだことを後悔し、『自分の務めを忘れないようにこれまで説教壇の上にいた』と言う。ここからKが思いちがいをしている点に関して推測されることは、自分の体験に基づいて裁判所を判断している点、即ち下級役人（Kが実際に知っているのはそのような者ばかりなのだ）の特性を上級裁判所のそれととりちがえている点であろう。さらにKは僧に対する自分の信頼をも打ち明ける。『裁判所の中であなただけは例外ですな。……だれよりもいちばんあなたを信頼しますよ』しかし僧はこの信頼の念に対しても裁判所批判と同様にはねつける。『思いちがいをしてはいけません』と。ここからKの学ぶべきことは、僧を援助者であると思いがえてはならぬということであろう。僧自身、Kを助けたいとはやる気持ちを苦勞して自制しているようだ。援助の手をさしのべないこと

が、ここではKにとっての援助なのだ。だから僧はKによって望まれた助言者の役割を拒否するためにKによって寄せられた信頼を拒み、Kから遠く離れた場所にいなければならなかったのだろう。

やがて僧は『あなたは裁判所のことを思いちがいでいます。法の入門書にはこの思いちがいについてこう書いてあります』と前置きをしてから「門番伝説」を語り始める。伝説の中でも田舎の男はKと同様の思いちがいをしていると言えるだろう。男も門番が自分を助けることができると思いこんでいる。だからこそ男は請願、買収、あげくの果てには蚤にまで援助を依頼するのだ。伝説はそのような行為は何ら男の利益になるところがなかったことを教えている。ここからKが学ぶべき教訓は、僧は言うまでもなく、弁護士、画家、女性等への援助依頼の一切が無益だということであろう。

またKが自分の体験から裁判所を価値判断するのと同様の誤ちを男も犯している。それはすでに述べたように男にとっては初めから門番という人物を通して以外に掟を認識することができないといういわば運命的な（というのは、ともかく出発せねばならず、そうしたところで憧れの充足は事実上不可能であり、さりとて憧れを捨て去ることもできず、その結果生涯を浪費してしまうのだから）悲劇としか言いようのないものである。

たしかにKは男の状況を自己のそれと同一視するのだが、にもかかわらず男のこのような思いちがいには気付かず、自分に有利な点だけを見てしまう。

僧が「伝説」を語り終えると間髪を入れずKは『男が思いちがいをするように、門番がだましたのですね』と言う。僧に対するKの信頼と彼からの助力の<sup>(6)</sup>期待に影響されて、あるいは僧が「伝説」を語り始める際の前置きによって、Kは当然この物語を自分の状況の<sup>(7)</sup>注釈的類似 (erläuternde Analogie) として理解する。つまりKは田舎の男を自分に、門番を自分がこれまでに会った裁判所の役人共に、掟をK自身がその中にいる法に一致させてしまう。これはKによる物語の普遍化である。しかもKはこの物語を自分に有利になるように解釈するのだ。もし門番が男をだましたとするなら、即ち僧の云う自分の思いちがいが裁判所の下っ端役人共が自分をだましたことに帰因しているとするなら、

「罪」あるのは彼らの方であって、自分の正当性が立証されることになる。これは訴訟から逃れ、自己の潔白を証明する必要から生じた解釈である。こう解釈することによってKは罪をもっぱら裁判所にのみ求め、自己自身のことを反省することには全く思い至らない。Kの裁判所観は「伝説」を聞く前とその後でと少しも変わっていない。このような解釈は僧の意図と全く別物であることは明らかである。従って僧がこうたしなめるのもまた当然と云えよう。『早合点してはいけません。他人の意見をよく吟味もせずに受け入れるものではありません』と。そして「門番が男をだました」とするKの解釈の根拠『門番は救済の言葉を、もうそれが男を助けることができなくなったときになって、はじめて言ってきかせたんです』に対して、『それよりまえには質問されなかったのです』と反論する。即ち、ここではKは男を自分と同じ窮状にさらされておりその弱さの故に門番が助けるべき人間として理解しているのだが、他方、僧はこの男を決定的な問いを以前に発せねばならず、またそうすることのできる理解力を備えた人間として理解している。しかし「伝説」の結末 (Vor seinem Tode sammeln sich in seinem Kopfe alle Erfahrungen der ganze Zeit zu einer Frage, die er bisher an dem Türhüter noch nicht gestellt hat.) は「田舎の男は個人として全ての人生経験に基づいて初めてこの質問を発することができた」ということを明示している。従ってKの見解も僧のそれも共に真実を射当ててはいないように思われる。Kは田舎の男の遅すぎた質問の責を何らとがめないことによって、即ち決定的な問いを発しえなかったことが男の生存と直接結びついていることを省察しないことによって、僧は男がその中にいる状況を全く考慮しないことによって、それぞれ偏った見解に達しているように思われる。Kは男の、僧は門番の無実を主張するだけだ。そして伝説が最も冷厳に情容赦なくどうしようもない男の運命を定着させている。

僧は「門番は男をだまさなかった」という新たな解釈を根拠づけるために門番による二つの言明に言及する。それは『今入ることは許せない』と『この入口はお前だけに定められたものだ』であり、この二言明間に矛盾がないことを証明することによって門番は男をだまさなかったとするものである。だが、こ

の証明は単に理論的に欠陥がないというだけのことで、男の生存上の状況を全く顧慮していない。田舎の男の最後の、決定的な問いは「今まで長いあいだの経験が全部あつまって」いること、つまり男はこの問いを見出すために全生涯を必要としたこと、あるいは男は何故それ以前にはこの問いを發せなかったのかということは僧の関心の外にある。つまりKにとっては自分の運命と同一視している男の運命に関する報告が、僧にあっては純粹に理論的な問題として扱われているのだ。これはまた伝説に対する僧とKの關係の相異でもある。僧にあっては（『あなたはこの話を私よりよく知っているし、また前から知っていますからね』とKが言う通り）この話はすでに反復してあらゆる解釈の可能性が試みられた「書物」であるのに対して、Kにあっては何よりもまず初めて耳にする、しかも自分の閉塞した局面が打開されるかもしれぬ状況の体験なのだ。

僧は伝説を理論的に扱う限りでは決して正しい解釈に至りえないことを知っている。だから『そうした意見をあまり尊重しすぎる必要はないのです。本それ自体は不変であり、一方人々の意見は、往々にしてそれに対する絶望の表現でしかないからです』と断言することができる。僧は先に「他人の意見の吟味」をKに要求している。つまり、Kの解釈「門番が男をだました」は伝説の中には書かれていないというわけで、門番の無罪の証明（合理的解釈）をしてみせる。ところが、ここでは更に「そうした意見（門番は男をだまさなかった）をあまり尊重しすぎないように」とも言っている。Kは僧の論理のなすがままに振り回されるばかりだ。結局、この伝説の解釈は解釈者が伝説内部のどれかひとつの立場を選択決定し、その立場から他の諸關係を見ることであって、立脚点が変われば当然のこと諸關係も変化するのだ。従って、解釈とはそれぞれ根拠づけうると同時に、偶然ある立場を選択するのであるから常に誤りを含みうる特定の思い違いであるにすぎないと言えよう。だから『人々の意見は……絶望の表現でしかない』のだ。

その後、僧は「門番こそがだまされた者なのだ」という、彼の言葉によれば「やはり尊重しすぎる必要のない」解釈さえ示す。次々にくりだされる解釈



は、伝説がKに与えてくれるはず思い違いの克服という任務からますます離れていくように見える。伝説はもはやKの状況の注釈ではなく、田舎の男が陥っているパラドックスへKをもひきずりこむ。

僧は最初明らかに一義的な内容をもつものとして伝説を導入する。次に僧は伝説を「他人の意見」(die fremde Meinung)と呼んで、それを相対化する。そしてKも伝説を「あなたの最初の解釈」(deine erste Deutung)と呼び、僧はそれを否定しない。次にKの解釈を退け、新たな解釈をもちだすことによって、今度は伝説の多義性をKに示すことになる。つまり合理的な解釈の混沌の中へKを引き入れる。これは結局、Kによる男の運命とKのそれとの同一視、即ち伝説の普遍化をやめさせ、しかも様々な解釈を尊重しすぎないようにとKを強いるのだから、Kの主体性の獲得を意図していると言えよう。そうした時にはじめて伝説はKにとって自己と切り離れた形で、田舎の男の不可避な、絶望的な状況を伝えるひとつのモデルとしての機能を果たしうるのだろう。

僧の見解は常に掟にかかわる者の側だけを扱っており、男に関しては言及を避けている。『その男はだまされたわけではないとお思いなんですか』というKの問いにも僧は『門番こそがだまされた者なのだ』と答えを巧みにすりかえてしまう。男の罪あるいは無罪について故意に言及しないことによって、暗にKの注意を男に向けさせようとしているように思われる。しかも門番は男をだまさなかったことはすでに証明されているのだ。Kに残された道は、従って、罪をただ門番のみに帰すだけでなく、より公平な目で男の側にも罪を探ることであろう。それは裁判所に対する自分の関係を初めから反省しなおす格好の機会をKに与えることになるだろう。

Kは、しかし、僧の二つの助言「他人の意見の吟味」と「そうした意見を尊重しすぎないように」のどちらにも従わず、一方では多様な合理的解釈の可能性に興味を抱き、他方ではあくまでも田舎の男の側に立つ視点に固執する。Kは男の無罪を証明するかもしれぬ最後の問い（それはまた僧が男の生死にかかわる状況を見無視している点をついた鋭い問いでもあるのだが）『門番の思いちがいが、彼自身をすこしも害わないかわりに、男に対しては千倍もの害を与え

ている』をぶつけるが、『門番は人間どもの批判の及ぶ身ではない』『(門番の言ったこと)すべてを真実だと思ふ必要はなく、ただそれを必然と思えばよい』という僧の切札の前にその問いもあえなく潰え去る。

Kは「ひどく疲れ」「この話のあらゆる推論過程を概観することができず」それを「自分の身から払いおとしてしまいたい」と思う。まさにその時にKは最奥の真理を見出したようである。そのことを Beda Allemann はこう指摘している。『K自身は物語に関する究極的な解釈を放棄したときに、そのこと(物語は解釈可能な範疇とは全く異った別の地平から把握されうること)を見ぬいたように思われる』と。<sup>(8)</sup>というのもKは次章冒頭で死の覚悟を決めているからである。

伝説の中にはKの救済の可能性は全くない。田舎の男の運命をKが自己の運命と重ねようと、ひとつのモデルとして理解しようと、男はその生存中には憧れを充足できず死んでしまうのである。だが、死んだ後で掟の内部に入れることが男の救済であるとみなすのならば(そして僧自らがその可能性、即ち門番は決して男の死後も門を閉めることができるないことを言っているのだが)、Kは自ら死を決意することによって伝説の正しい理解に達したと言えよう。死を決意することによってKは職業世界よりも上級裁判所への入廷を上位に置いたのだ。

このことに関連して、男と掟の関係はそのままKと上級裁判所の関係ではないことに言及しておかねばならぬ。田舎の男が自由意志で掟を求めているのに対し、Kは逮捕され、告訴されている身分なのだ。なるほどKは後で述べるように意識の深層では上級裁判所への入廷を求めている(このことは逮捕で始まる、一連の裁判所との接触によって証明されるのだが)と言えるのだが、Kの場合には自由意志からではなく、追われる者としていわば倒錯した形をとっている。Kは自分の訴訟を上級裁判所へ進めようと努力するが、それは男と掟の場合のように上級裁判所へ至ること自体が目的なのではなく、職業世界での自分の地位を再び安全なものにするための手段なのである。即ち男が掟の絶対的な価値を認識しているのに対し、Kは裁判所への入廷を自ら熱望するに足る恩

籠であるかもしれぬことには気づかず、逆に自分の生活を脅すものとして認識している。このような倒錯した形を元の形にもどすことがあるいは僧の務めだったのかもしれぬ。

### 3

Kにとっての本当の自由と自立とは何か。結局Kは田舎の男と同様に惨めな死をとげるのであるから、ここで言う自由と自立とはあくまでも可能性としてのそれにとどまるのだが。そして、それはこの拙論の始めて扱った田舎の男の三つの可能性の例証となるものである。それは(1)訴訟からの完全な回避と(2)訴訟への完全な没頭のいずれかであろう。Kの態度はロマンの最初からこの二極の間で揺れ動いている。銀行の物置での一件、あるいは僧に呼びとめられた時のKの振舞にそれは端的にあらわれている。物置を小使たちに片付けさせることによって裁判所の痕跡を拭い去ろうとするK、あるいは僧の呼びかけに逃げ去ることを考えながらも、『飛ぶような大股の足どりで』説教壇に突進するK。

(1)訴訟からの回避。第一の例は叔父によって勧められる田舎での滞在である。『とにかくいちばんいいのは、ここで少し休暇をとって、田舎のわしらのところへ来ることじゃろう。……そうすればいくぶんかは裁判からののがれられるわけだ』ところがKは「自分の実際的な経験」を後楯にしてこの提案をしりぞける。Kは田舎での滞在を「逃走」「罪の意識」ととられることを恐れ、裁判所にたち向かう決意を明らかにする。このような提案をする叔父をKは『この事件を重大視し、ひどくむずかしく考えている』と責めるのであるが、当のK自身もそれに劣らず裁判所のありえそうな見解を恐れることによって事を重大視している。伝説中の男も田舎へ戻ることは念頭に浮かばなかったことはすでに見た通りである。

訴訟からの完全な回避の例を、ロマンからは外された未完成の章『エルザのところへ』が示している。ここでKは裁判所からの出頭命令を反抗的に断り、女友達エルザのもとへ車を走らせる。この時初めてKは誰の助力をもあてにせ

ず、独力で裁判所に立ち向かっている。するとKは『次第に裁判所のことを忘れてゆき、また以前のように銀行のことをいろいろ考えて、それで頭がいっぱいになりはじめる』この断片は余りに短いまま中断しているので、ロマンがこの方向へも展開可能だったのかは疑わしいが、少なくとも Honegger の言う『審判からの確かな回避が実際に解放と救済を意味する<sup>(9)</sup>』ことは確かである。だが、実際にロマンの中に組み込まれた第三章の冒頭部はこの断片と鋭く対比している。ここではKは裁判所からの新たな通知を待っており、それが来ないにもかかわらず、自ら審理室へ出向いてゆくのだ。

Kはたしかに意識の表層では訴訟の世界から逃れようとしている。すでにロマン冒頭の『だれかがヨーゼフ・Kを中傷したにちがいがなかった』という推測がそのことを示している。Kはそう推測するによって職業世界とは次元を異にする審判の世界を職業世界にとりこみ、つじつまを合わせようとしたのだ。逮捕の際に彼が監視人たちの身分証明書の提示をもとめるのもこれと同一線上にある行為である。だがKを誰かが中傷した事実はなく、身分証の提示も聞き入れられず、裁判所の法はKの属している法治国家の法律とは全く別物であることが分る。しかし逮捕されて以来、裁判所がKに対して先に手を出すことはなく、実はKの方が裁判所を追うのだから、Kは自分でも気付かぬ深層では裁判所を究めようとしているとも言えよう。監視人の一人はこう言う。『おれたちのお役所は、民衆の中に罪をさがしまわるなんていうまねはしていないんで、法律にもあるとおり、ただ罪によってひきつけられるというだけなんだ』僧も別れ際に同様にこう言っている。『裁判所はあなたになにも求めはしないのだ。あなたが来れば迎え、行くならば去らせるだけだ』と。Kには表層と深層とで意識の分裂が認められる。Kは意識の深層では田舎の男が掟を求めるのと同様に、裁判所への入場をねらっているのだ。従って、Kにとって訴訟世界からの完全な回避はそもそも不可能なのである。

(2)没頭とは即ち掟の門の突破のことである。この例はいくつか見出されるが、まず『田舎の婚礼準備』中の二つの断片である。一方の断片では「私」は知らない内に門番のところを通りすぎてしまい、門番はぼんやりしたまま黙ってい

る。この「私」はつまり門番のことをいささかも意識してなかったのだ。田舎の男が直接掟ではなく門番のところへ来ることと考えあわせると、門番を意識しなければ掟の中へ入れるのか、あるいは掟そのものも霧散してしまうかどちらかであろう。この断片の「私」はなるほど門番のところを通過するのだが、その向こう側に何があるのかは分らない。もう一方の断片では<sup>(11)</sup>（それは『掟の前で』にずっと近い構造をもっているのだが）田舎の牧師風の中年男が偶然に選択した、悪意のない、だが明確で具体的な理由を告げることによって、まんまと門番をだしぬき、入場に成功している。ここから Honegger は『入場を要求することが本当に重要である者にとっては門番は全く何の意味も持っていないように見える。全てはただ彼自身、彼の目的の確実さ、彼の定まった意志、彼の勇気次第なのだ』<sup>(12)</sup>と言っている。

『不十分な手段、いや子供っぽい手段ですら救いに役立つこともありうる説明』という言葉で始まる『ジレーネの沈黙』 („Das Schweigen der Sirenen“) も同様に掟の門の突破を扱っていると言えるだろう。「一握りの蠟と一束の縄に全幅の信頼」をかけて彼は見事に妖女たち（＝門番）の住む島（＝門）を通過する。この小品は先に挙げた二つの断片を合わせた性格を持っている。つまり「私」が門番を意識せずに通過するように、オディッセーだけが天下周知の中で蠟と縄がジレーネの歌に対して無力だということに気づいていない。ところがジレーネは歌ではなくそれよりもっと恐ろしい武器である沈黙で彼に対抗する。オディッセーはそれでもなお蠟と縄のおかげで女たちの歌を自分だけが聞かないでいられると思ひこむ。彼は狡猾な男で、第二の断片で田舎牧師が門番を欺いたように、ジレーネたちが沈黙しているのを実は知っていたかもしれない、とカフカは付け加えている。

『単なる「夢」を暗示する』(Emrich) という理由によりロマンから取り除かれた未完の章『その建物』もこの突破を扱っている。ここでKは独力でではないが、伝説の門番の特徴を思い出させる「すぐにくどきおとせる、軽率な、きびしい責任感など持たない」画家チトレリの手を借りて、裁判所の内部へ入ることに成功する。突破はあっけないほど簡単に成就される。階段を越えてい

く運動は『水にうかんだ軽いボートのように』何の骨折りも必要としない。すると『今まで後からさしこんでいた光がかわって、突然前からまばゆくどっと流れて』くる。Kの周囲は『みんな前より落ちついてすっきりした感じ』になる。Kは訴訟世界と職業世界の間での動揺と不安から完全に解放される。

もうひとつの夢の中の出来事を扱う断片『夢』では、『審判』の主人公と同名のヨーゼフ・Kが死において救済を見出している。Kはひとつの土饅頭にずるずると誘いよせられる。丁度田舎の男が掟に憧れ、出発したように。芸術家が刻む墓碑名にKは心を奪われるが、Kも芸術家も墓碑名が完成されないことで苦しむ。自分の存在が芸術家の仕事の障害になっていることにやがて気づいたKは、墓穴の中へ自ら身体を横たえる。すると頭上では彼の名前が墓石上で動き回っているのだ。憧れを満たすには、Kは自己自身を断念せねばならない。

『アメリカ』の主人公カール・ロスマンが最後に採用されるオクラホマの自然劇場も同様の突破を扱っている。ここでは門はカールだけのためではなく、芸術家たらんとする大勢の人々のためにも開かれている。報酬のことにはふれない「なんとなくいんちきくさい」人集めのポスターが、ここでは伝説の門番の役割を演じているように思われる。カールは身分証も持っておらず、流浪の後で自分をつなぎとめる場所をもっていないのだから、おそらく自己自身を断念していたと言ってよいのだろう。（監視人に身分証を提示し、銀行の業務主任であるヨーゼフ・Kとは好対照だ）だからこそカールは採用にこぎつけたのだろう。

身分証を持たない男と番人の居ない城門を描く断片が『田舎の婚礼準備』<sup>(13)</sup>の中にある。

この拙論を書くにあたって、とくに以下の4著書を参考にしています。

- (1) Ulrich Gaier: Vor dem Gesetz.
- (2) Josef Hermann Mense: Die Bedeutung des Todes im Werk Franz Kafkas.
- (3) Jürg Beat Honegger: Das Phänomen der Angst bei Franz Kafka.
- (4) Beda Allemann: Kafka. Der Prozeß.

なお „Der Prozeß“ 本文の訳は、岩波文庫『審判』辻理訳を借用させていただきました。

#### 注

- (1) Kafka, Franz: Tagebücher 1910-1923, Fischer, Frankfurt a. M., 1976, S. 326.
- (2) Kafka-Symposion; Deutscher Taschenbuch Verlag, München, 1969, S. 50.
- (3) Mense, J. H.: Die Bedeutung des Todes im Werk Franz Kafkas, Lang, Frankfurt am Main, 1978, S. 38 f.
- (4) a. a. O., S. 39.
- (5) Emrich, Wilhelm: Franz Kafka, Athenäum, Frankfurt am Main, 1970, S. 268.

邦訳『カフカ論Ⅱ』, 志波一富, 中村詔二郎訳, (冬樹社, 1971年) 76頁。

- (6) 『しかしそれでもKには、僧の善意は疑う余地のないもののように思えた。もし僧がここへおりて来たなら、意気投合することも不可能ではなかったし、彼から得心のいく決定的な助言をうけることも不可能ではなかった。たとえばその助言とは、訴訟を動かす術とまではいかないにしろ、訴訟から脱れる術とか、訴訟を回避する術とか、訴訟の外に生活する術などを教えてくれるものなのだ……もしこちらが頼みさえすれば、それを洩らしてくれるかもしれないのだ』
- (7) Gaier, Ulrich: Vor dem Gesetz, in: Festschrift für Friedrich Beissner, Lothar Rotsch, Bebenhausen, 1974, S. 104.
- (8) Allemann, Beda: Kafka. Der Prozeß, in: Der Deutsche Roman. Vom Barock bis zur Gegenwart, August Bagel, Düsseldorf, 1963, S. 282.  
邦訳『カフカの「審判」』, 喜多尾道冬訳, (審美文庫, 1975年) 83頁。
- (9) Honegger, J. B.: Das Phänomen der Angst bei Franz Kafka, Erich Schmidt, Berlin, S. 290.
- (10) Kafka, Franz: Hochzeitsvorbereitungen auf dem Lande, S. 260.
- (11) a. a. O., S. 233 f.
- (12) Honegger, J. B.; a. a. O., S. 291.
- (13) Kafka, Franz: Hochzeitsvorbereitungen auf dem Lande, S. 175.